

# ◆第24回みつなかオペラ「ノルマ」公演評◆

日本経済新聞 夕刊 2015年9月25日

## オペラ

### ■ ベリーニの歌劇「ノルマ」



舞台を大きく華やかに感じさせた演出

市民オペラとして平成3年に始まった兵庫県川西市みつなかホールのおペラは、オペレッタからイタリアの名作に進み、24回目でベリーニの大作にたどり着いた。「ベリーニ・ペルカント・オペラ・シリーズ」最終第3回と銘打つ「ノルマ」の初日を観る(9月19日)。

客席が500に満たない空間に、人数を限界まで絞ったオーケストラ(ザ・カレッジオペラハウス管弦楽団)から指揮者、牧村邦彦が職人芸で張りのある表情を引き出す。欧米の小さな歌劇場は、きつとこんな風なのだと思う。

そして井原広樹の演出は、型どおりの芝居を堂々とやり切って、舞台を大きく華やかに感じさせる。ローマ帝国と

### 大作、正攻法で堂々と

ケルトのドゥルイド教団の対立に、許されざる恋を絡めた物語は、言葉にすると複雑だが、実際の舞台を観れば必ずわかる。良質のイタリア・オペラの作劇術を信頼していはばこそ正攻法だろう。

第2幕でノルマ(並河寿美)が敵方の将軍ポリオーネ(松本薫平)との間に生まれた実の子を殺そうとする間奏の独り芝居は「トスカ」を思わせる。第1幕で心変わりした将軍が若いアドルジーサ(佐藤信子)に言い寄る二重唱の迫力はツエルディを先取りしている。松本の輝かしい声を得て、イタリア・オペラ好きにはたまらない場面になった。

そしてやはり、主役の並河から目が離せない。ポリオーネを信じようと第3幕冒頭の透明な歌唱が本来の持ち味だが、教団の男たちを制する強く重い口調。復讐の鬼となった声の鋭さと、狂乱の場面のドライブ感。指揮者の好サポートで、終始、状況を説得的に演じ分けた。

最後はさすがに音が飽和してしまっただけ、この空間のイタリア・オペラも悪くない。(音楽評論家 白石 知雄)

## 音楽の友 2015年11月号

### ◆みつなかオペラ《ノルマ》

この10年ほどはイタリア・オペラを集中的に上演している「みつなかオペラ」——430人前後の客席数、30名程度収容のオーケストラ・ピットでありながら室内オペラ的なイメージにならず、リダクションを施した管弦楽編成でオーケストラを壮麗に響かせ、移動装置を利用して舞台を巧みに構築する。今回も牧村邦彦指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管が堂々たる演奏を聴かせ、井原広樹の演出も写実的かつ伝統的な様式ながらも細密な演技を展開させていた。歌唱も素晴らしい。尾崎比佐子(ノルマ)はドラマが進むにつれ気魄に富む表現を増し、最終場面まで伸びのある美声を保つ。これに木澤佐江子(アドルジーサ)が張りのある声で渡り合い、藤田卓也(ポリオーネ)も劇的な歌唱で迫り、片桐直樹(オロヴェーン)も風格に富むバズで応じる。大阪の小さな劇場で、関西に本拠を置く演奏家たちを中心にこれだけ音楽的水準の高いオペラが上演され続けていることは、もっと全国に知られてもいいだろう。(9月20日・川西市みつなかホール)

〈東条碩夫〉

# 世界に誇れる成果をあげた ベッリーニシリーズ集大成

第24回みつなかオペラ 「ノルマ」

## オペラ評

みつなかオペラベッリーニシリーズの3作目、最終回として「ノルマ」が上演された。継続して演出を担う井原広樹の舞台は、伝統的な手法ながら、演技者の細かい動きまで工夫されている。主役歌手の動きが乏しすぎると感じる場面もあったが、アントニオ・マストロマッティの落ち着いた深い青と茶色を基調とする装置と相まって重苦しくならない。衣装は村上

まさあき。

並河寿美（ノルマ）はやや暗めの音色ながら力強く歌い、求められるものの多いこの役で聞き手の期待に応えた。松本薫平（ポリオーネ）も熱演。佐藤信子（アダルジーザ）、畑実（オロヴェーゾ）、野津良佑（フラウイオ）、河野佳子（クロテイルデ）そしてみつなかオペラ合唱団（合唱指揮岩城拓也）も堅実に歌った。ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団は豊富な舞台経験を生かした演奏を聞かせた。今回はオ



撮影：仲野達也 提供：みつなかオペラ実行委員会

ケピットの制約もあり、管弦楽編成のリタクシオンを倉橋日出夫が担当し、成果を上げた。

本公演の成功は牧村邦彦の指揮に負うところが大きい。ベッリーニ作品の様式を把握し、歌い手と呼吸をあわせて、息の

長い旋律を歌わせ、南国的な息吹を感じさせる一方、品位と力強い表現にも欠けるところがない。

ベッリーニのオペラは初演でノルマを歌った名歌手パスタはじめ、出演する歌手の特質を最高に発揮するように書かれ、再

演では新たな歌手にあわせて作曲家により加筆が行われたこともある。今なお論議を呼ぶ部分もあり、長く人気を保つ曲ながらその真価を発揮する上演は容易ではない。楽譜の研究が進み、リコルデイ社からベッリーニ作品の新校訂版楽譜が出版継続中であるが（今回はカルマス社版を使用）、現時点での集大成として、川西市での充実したベッリーニ歌劇連続上演は世界に誇れる成果をあげたのではないか。来年は「マノンレスコー」上演が予定され、この500席弱のホールでのブッチーニ作品上演には新たな課題が加わるが期待は大きい。（9月19日、みつなかホール）（夏山知）